和句連歌集

三

宝徳四年千句
享徳千句
異体千句

高橋喜一
藤本徳明
荒木尚
島津忠夫
編

古典文庫

高橋喜一
藤本徳明
荒木尚
島津忠夫
編

千句連歌集

三

宝徳四年千句
享徳千句
異体千句

古典文庫

古典文庫第四一三冊©

昭和五十六年二月二十日印刷発行

千句連歌集

三

編者　高橋喜一　藤本徳明　荒木尚　島津忠夫

発行者　吉田幸一

印刷者　白橋印刷所

発行所　114　東京都北区西ヶ原三ノ三四ノ一二　古典文庫

電話（九一〇）二七一七

振替口座東京九・一四五九七番

非売品

不許複刻

目次

宝徳四年千句〈城崎温泉寺蔵〉……九
享徳千句〈小松天満宮蔵〉……一二
異体千句〈島原松平文庫蔵〉……二三
解説……三二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

凡　例

一、『千句連歌集　三』として『宝徳四年千句』『享徳千句』『異体千句』を収める。

二、底本には、『宝徳四年千句』は城崎温泉寺蔵本、『享徳千句』は小松天満宮蔵本、『異体千句』は島原松平文庫蔵本をそれぞれ用いた。

三、翻刻に際しては、次のような方針に従った。

1、底本を忠実に翻刻するように心掛け、漢字仮名の別、仮名づかい、送りがなどは底本のままとしたが、おどり字は〻々を用い、異体の文字は、漢字、仮名ともに通行のそれに改めた。

2、本文庫の性質上、本文に一々校合を加えなかったが、明らかに底本に誤脱

があると思われる所、また意味不通の個所、他本によると意味が大きく変る部分などに限って次の諸本により異同を注記した。その際、校合すべき部分は底本の本文に黒点を施し、校合本の本文は（　　）内に記し、その下にゴジックで校合本の略称を示した。従って黒点を施した本文が上になくて、（　　）に入れてあるのは校合本にのみ存する本文である。校合本の略称は左記によった。

（宝徳四年千句）

満＝天満宮文庫蔵滋岡長松書写本

静＝静嘉堂文庫蔵連歌集書所収本

（享徳千句）

静＝静嘉堂文庫蔵連歌集書所収本

満＝天満宮文庫蔵滋岡長松書写本

陽＝陽明文庫蔵本

（異体千句）

静＝静嘉堂文庫蔵連歌集書所収本

京＝京都大学国文研究室蔵本

校合本が底本に対して共通した異文をもつ時はその略称を省略した。

2、底本の誤脱・誤写に加えられた注記はすべてそのままとし、編者の私注はすべて＜　＞に入れて示して、底本にある注記と区別した。傍注の＜　＞の中で、処理できない点については、1・2以下の番号を付して、それぞれの千句の翻刻の後に注記した。

4、百韻ごとに句の上に通し番号を付した。なお、懐紙の折、面のはじめには、ウ（初折裏）二（二折表）二ウ（二折裏）三（三折表）三ウ（三折裏）ナ（名残折表）ナウ（名残折裏）の略号を付した。

『享保千句』の場合、底本には、裏のところに○、折のはじめに、二、三、四などの符号が見えるが、落ちている所もあり、右に統一した。

四、『宝徳四年千句』は高橋が書写して、天満宮本と校合、『享徳千句』は藤本が書写、『異体千句』は荒木が書写して、静嘉堂文庫本と校合してできた原稿を、さらに島津が他本との校合を加え、統一をはかり、校正を通して相互に検討を加えた。解題は、高橋の素稿、藤本・荒木の調査にもとづき島津が記した。

五、本書の成るに際しては、翻刻の御許可を賜った城崎温泉寺、小松天満宮、島原松平文庫、校合本の閲覧を許された大阪天満宮文庫、静嘉堂文庫、陽明文庫、京都大学国文研究室、『享徳千句』の写真を貸与された藤田福夫氏に深く感謝の意を表する次第である。

昭和五十三年九月

高橋喜一
藤本徳明
荒木尚
島津忠夫

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

宝德四年千句

〈城崎温泉寺蔵〉

十花千句

何人　第一　寶德四年二(三)月十三(二)日

一　花そころたれかは待し今朝の雪　宗砌
二　にほひ木ふかきむめの下かけ　宗松
三　袖と見る野への霞に月落て　賢盛
四　あけたつ旅のころも春かせ　忍誓
五　関の戸にけふは年もや越くらん　専順
六　をとしつかなる山中の水　日晟
七　滝とをき行手の小川つらゝゐて　原春

八　をのかむらねやさむき鴨とり　超心
九　あさ床になをこそはらへ夜るの霜　竜忠
一〇　ふりぬるさとにかよふ秋風　与阿
一一　見し夢やまく□（ら）の月に帰らん　梁心
一二　鹿のふしとをあらすかり人　金阿
一三　夏ふかき山の下草ふみ分て　利在
一四　し水かもとやすきかての道　貞明
一五　追しほにいま磯きはのとまり舟　吉理
一六　いくうら風そつたふこゑ〳〵　盛
一七　枝にちるあられ松原むら立て　砌
一八　ひろはむ玉はまれのことの葉　忍

二

一九　あふきゝけ説こそ法の光なれ　順

二〇　名にのこりたる代々のふる寺　松

二一　月そなき竹の林のすゑの秋　砌

二二　小とりやさはく薗の夕霧　原

二三　すさましきさとのうしろの山風　晟

二四　舟さしとむる須磨のうら浪　英

二五　淡路かたうしほのむかふせとをみて　忍

二六　こゝろつくしは我ひとりかは　松

二七　今夜又たのめぬ鐘を聞もうし　竜

二八　あはゝそ鳥のねをもかこたん　順

二九　夢にたに待人うとき目はさめて　砌

阿

三〇　まつ風吹ぬ（ふかき）花の山さと　晟

三一　峯こゆる雲の春雨残日に　与

三三　かすみもしほる旅のあさ衣　梁

三三　わけ来つる野をはゆふへや隔らん　盛

三四　かりねの一夜あけはつる比　忍

三五　又問はむ人や契のかたゝかへ　砌

三六　なみたふたかる月はうらめし　超

二ウ

三七　時雨ふる霧のまよひの別路に　金

三八　野ゝ宮さひて秋そ暮ゆく　梁

三九　木葉はや且ちるかせの嵐山　松

四〇　あらしやまたん我か庵の友　砌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com